

## 大学

## 志の連鎖。未来への希望を絶やさない。

仙台市

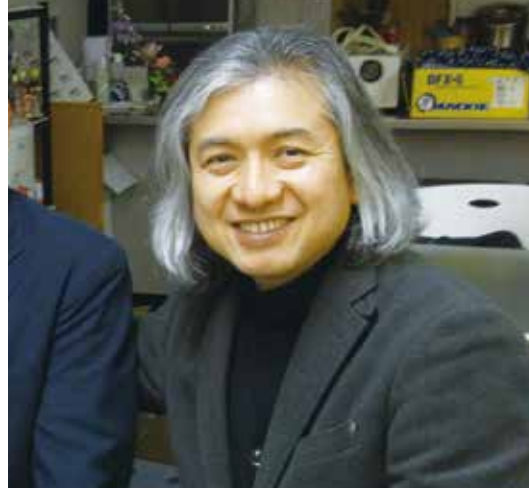
風見 正三 宮城大学

取材日 2012.10.25

2008年4月から、宮城大学事業構想学部教授に就任。全国の都市再生、地域再生、環境共生のプロジェクトや都市政策、環境政策、ソーシャルビジネス、コミュニティビジネスに関する調査研究に携わっている。震災後、宮城県東松島市でC.W.ニコル氏とともに「復興の森づくりと学校プロジェクト」をスタートさせた。

## 3月11日 14時46分

大震災の当日は、東京でイベントに参加していたが、長く大きな揺れに会場が騒然となる中、上方の落下物を点検しながら、揺れが止まるのを待った。その時は、あまりの揺れの大きさと長さに関東大震災が起きたと思った。揺れが止まるのを必死に祈りながら、まずは、身の安全を守る方法を必死で考えていた。人間はとっさに自分の身を守るために実にいろいろなことを考えるものだと思った。現代の日常では、リスク管理はほとんどされていない。こうした場面に直面した時に人間の生存本能が試されると感じた。イベント会場はたくさんの子どもたちが留まっていたが、彼らはいざという時にともしっかりしていて、大人よりもずっと冷静だったことを覚えている。そんな時でも、連帯感を持ち、お互いをかばい合っていた。3.11は、その翌日が国公立大学の後期入試で、私の脳裏に浮かんだのは、とにかく今日中に仙台に帰らなければならないということであった。揺れが収まってきて、まずは、タクシーを呼んでもらうために事務室に向かい、そこで見た光景を私は今でも忘れることができない。事務室に入ると、東北が震源地であることを知らされ、テレビでは東北の沿岸部を襲う津波の信じがたい光景が映し出され、ただただ言葉を失い立ち尽くすしかなかった。まるで、パニック映画を見ているようなリアリティのない感情を今でも覚えている。目の前に、リアルな津波の映像が何度も流され、その光景を見ても信じられない気持ちと現実でないように祈る気持ちが交錯していた。時間が経つにつれ、「東北の地震だったんだ…」という現実と向かい合い、知人や学生が今どこにいるのか、宮城を離れていることで余計に不安は募った。翌日は国公立大学前期入試で、何としても宮城に帰らなくてはならない。ひとまず東京の自宅に帰る判断をしてタクシーを捕まえ、幸運にも東京の自宅まではたどりつけた。東京の自宅に着いてからも停電が続き、情報も得られず、新幹線は動くのだろうか、高速道路は大丈夫なのだろうかと考えを巡



らせ宮城に帰る方法を考え続けたが、インターネットもつながらず、大学のメールも使えず連絡が取れない状態でどうすることもできなかった。首都圏にいても停電が続いている地区では情報が手に入らず、情報的に孤立していた。当日、明け方まで連絡もとれず、宮城にも帰ることはできず、学生の安否もわからず、不安な夜を過ごした。徐々に交通機関がマヒしている現状や被害の甚大さも分かり、しばらくは東京に留まり、学生の安否確認や物資調達の支援をしていこうと決心した。日が経つにつれ、徐々に携帯電話のメールやSNSを利用して学生の安否も確認できるようになってきた。

アースデイ東京からの  
大震災についての緊急声明

東京にいる自分ができることはと考えて動いたことが被災地への支援の呼びかけと緊急記者会見だった。そして、アースデイのメンバーからのお声掛けで、3月14日、渋谷のUSTREAM STUDIOで行われたアースデイ東京からの大震災についての緊急記者発表に、アースデイ仙台顧問として出席した。アースデイ東京は、市民による日本最大級の環境イベントで、この記者発表はもともと毎年恒例の開催発表を予定していたが、

急遽アースデイ東京からの大震災についての緊急声明に内容が変更となった。

緊急記者発表に出席するため渋谷へ行く途中、福島原発が爆発したニュースが伝えられ、東京から帰途につく大勢の人々を見ながら、逆方向のガラガラの地下鉄に乗っていた。渋谷は、ゴーストタウンのような有様で、パニック映画さながらの様相を呈していた。

記者会見では、アースデイ東京として被災地への支援活動を行ない、現地復興支援のために義援金を募集すること、福島原発での原発震災について世界へのアピールを行なった。また、会場で仙台の学生と中継し、被災の状況を伝え、アースデイ東京の実行委員長C.W.ニコル氏とともに東北・日本を救おうと声明を出した。

それから2～3週間は、ガソリンがなく動けない状況が続き、まず、自分が東京でできること実行しようと思い、安否確認と物資調達を行なった。仙台の学生や仲間と電話で連絡をとりながら、被災地で必要なものを確認し、さまざまな支援団体につないだり、新潟経由で東京と東北を行き来して物資を仙台に送った。

## 「心に木を植える」プロジェクト

この3.14の緊急記者会見が契機となり、C.W.ニコル氏との復興支援の活動が始まった。C.W.ニコル氏は、長野県の黒姫の荒れた幽霊森を素晴らしい森として再生しており、心に傷を持った子どもたちを森に招くプロジェクトを続けていた。今回、C.W.ニコル氏から東北再生のために、震災で悲しい体験を持った子どもたちをこのアフアの森に招く「“心の森”プロジェクト」を進めることを提案頂いた。このプロジェクトは一般財団法人C.W.ニコル・アフアの森財団とOne by One こども基金が児童養護施設の子どもたちを対象に行なっている宿泊型森林セラピープログラムで、豊かな森で散策や自然観察、川遊びなど全身で遊ぶことを通して、心を解放し、自然や他者を理解し、尊重する心を育むことを目的としている。私は、交流の深かった仙台市、南三陸町、大崎市、東松島市に声をかけ、真っ先に動いたのが東松島市だった。市民協働推進の長い付き合いがここに結実したともいえる。震災復興は、まずは心の復興から。震災で傷ついた子どもたちに森で癒されてほしいと思い、被災された方々を長野県黒姫のアフアの森へ招待した。プログラムが終了して帰る頃には皆「震災があったからこそ、この森に出会えたんだ」と言って感動し、涙ながらに別れた。

## “心の森”プロジェクトからつながった志の連鎖

2011年の8月と9月に「“心の森”プロジェクト」が実施された。そして、この活動が思わぬ大きなプロジェクトにつながるようになった。このプロジェクトがご縁となり東松島市との交流は深まり、ニコルさんも私も東松島に何度も足を運んだ。子どもたちの心には、アフアの森を見て、東松島でもこうした美しい森を再生しようという気持ちが芽生えてきた。また、このプロジェクトに参加した市民や行政の方々も協力して、東北で美しい森を再生していこうという機運が高まった。人間の力で自然を再生できる希望をアフアの森でつかんだのだ。

東松島市の教育委員会と私たちは、これからの学校教育の在り方を議論し、森の学校を目指してさまざまな検討を行なっていった。11月には教育復興委員会が設置され、津波で流されてしまった学校の統廃合やこれからの学校づくりをどうするかを検討する委員会が始まった。森の恵み、木登り、火おこしなどのサバイバルな知識を学ぶ学校、地域と共に子どもたちを育てる学校、それが、「森の学校」のビジョンである。現代は、そうした生きる力が衰え、自然とのかい離や社会への不安感から、いじめが起きてしまい、未来に希望を感じられない子どもが多くなっている。大震災でたくさんの命や財産を失ってしまったけれど、それを超えて、より良いものをつくる。未来を共につくっていく機会にする。現在の教育の良いところは残し、悪いところを正していこう。大震災を越えて、我々は決して同じものをつくってはいけない。子どもたちの学ぶ環境は安全な方がいいと思いがちであるが、これまで手取り足取りの仕組みが弱い人間をつくってきた要因にもなっている。「自然欠乏症候群（NDS）」という症状が世界で注目され始めている。自然とのかい離が精神の不安定を引き起こし、生きる力を失わせている。この大震災で、我々は多くの命と財産を失ったが、これまでの社会の問題点を解決し、今こそ、子どもたちに持続可能な未来を残すために、既存の壁を乗り越えて、大きなチャレンジをしなければならない。

## 復興の森づくりと森の学校プロジェクトがスタート

こうして地域の自然を活かした高台の森の中に、里山の集落のように木造の教室が点在する学校を目指して、2012年2月「復興の森づくりと森の学校プロジェクト」がスタートした。ニコルさんを中心にアフアの森で培ってきたコンセプトをベースに、森の中で自然を楽しめて、地域の中で

皆が支え合えるような仕組みを持つ公立の小中学校をつくるプロジェクトが始動している。子どもたちに未来への希望を持ってほしい。このプロジェクトはそのためにある。重要なことは、「未来を信じる力」。

私は、これまで長くまちづくりに関わってきて、持続可能なまちづくりの基礎となるのは「教育」と感じてきていた。「教育」という言い方はもう古いかもしれない。「教育」は、文字通り「教える」部分が強い。これからは、「Education (教育)」ではなく「Leaning (自ら学ぶ)」であるべきだ。「森の学校」は教え込まれるのではなく、自ら能動的に動いて危険を学ぶ「Leaning (自ら学ぶ)」による体験的な叡智を積み上げる学びの過程だ。

今、このプロジェクトのために、東松島市にいろいろな人が集まってきている。教育委員会や復興政策部には熱意のある人が多くいて、森の学校のコンセプトに惚れ込み、仕事を越えて推進してくれている。被災地の子どもたちのために何かしたいというニコルさんの思いが東松島の子どもたちや大人たちを変えていっている。プロジェクトが成功する時は、「天の時、地の利、人の和」がそろろうと言われるが、「森の学校プロジェクト」は、まさにそれがそろってきていると感じている。「心の森」プロジェクトを通じて、ニコルさんとも深く知り合うことができた。私は、2008年4月に宮城大学教授に就任し、持続可能な地域づくりの研究と実践を進めてきたが、3.11によって、たくさんの友も失い、自分自身も一日違えばこの世にいなかったかもしれない。大震災で命が繋がれたということは私の運命と感じている。あの日失われた命を想わない日はない。そして、大震災の直後、アースデイの緊急記者会見でニコルさんと会い、共に東北復興を進める約束をし、東松島市を結びつけられたことを本当に嬉しく思う。ニコルさんは自然を愛し、勇敢で真っ直ぐな人だ。この心から信じられる同志とともに、被災地の子どもたちに希望を生み出すプロジェクトを進められることは人生の大きな目標に近づいた気さえしてくる。ニコルさんも自らの運命だと感じると話してくれた。私は涙が出るほど感動した。このプロジェクトには、まだまだ多くの難関が待ち構えているだろうが、子どもたちの未来のために、みんなで力を合わせて乗り切っていきたい。

## 今後の課題

2012年7月、C.W.ニコル・アフアの森財団と東松島市の間で「震災復興に向けた連携及び協力に向けた協定書」が締結され、森の学校を進める協力関係も動き出した。2012年7月には、子ど



撮影：2012.9.15 アフアの森 ワークショップ

もたちと行政担当者をアフアの森に招いてワークショップを行なった。アフアの森を体感しながら、みんなにどのような学校を作りたいかを考えてもらった。子どもたちからは「森のきのこを使って給食を作ろう」「作った給食は外で食べよう」と素敵なアイデアが次々に飛び出てくる。子どもたちは既に十分自然の森を楽しむ方法を分かっていた。そして、自然を愛するピュアな心を持っている。この美しい心を大切にしたいと思った。2012年10月には、東松島市の小中学生、その家族、プロジェクトに関わる企業や団体の方々とプロジェクトの計画地に入って森づくりを行なった。そして、2013年2月には、宮城大学風見研究室が、森の学校の基本計画を東松島市から正式に委託を受けて検討が始まっている。基本計画では、東松島の自然環境を踏まえて、どのような森の学校にすべきか、自然の森を活かした教育プログラムをどのようにつくっていくか、検討を進めている。この計画は、子どもたちや先生が未来に希望を持てる計画にならなくてはならない。今後、この計画を地域とともに共有し、意見交換を通してまとめていくことになる。この森の学校は、地域の学校、未来に続く学校だから、地域の人々と共につくり、地域に愛される学校でなければならない。

今後は、そうした活動をどんどん行ない、森の学校プロジェクトに関わったみんなが、震災後、世界にひとつしかない新しい学校を自分たちが作ったといえる誇らしい体験を積んでいってもらいたい。スタートは今からだという想いを共有したい。森を切り開いた時から学校づくりは始まっている。スペインの教会サグラダ・ファミリアのように、地域みんなが手づくりで進めていけるプロジェクトを目指したい。これまでのような学校を作るのではなく、未来への希望を持てる学校、美しい社会を共につくるための拠点となる学校を作

りたい。それによって、たくさんの志のある企業がこれからも協力してくれるだろう。

## 未来への希望を絶やさない

私は、持続可能なまちづくりを専門としてきたが、これまで警鐘を鳴らしてきたことが大震災で全て現実化してしまったことがとても悲しい。多くの命が失われたことはとても悲惨であり、そこから立ち上がるのは至難の業である。震災直後は喪失感が大きく動き出すことができない時期もあった。でも、何かやらなければと感じ、子どもたちの希望を作ろうと考えた。子どもたちが森で喜んでいる姿を見ていると、「本当に良かった、もっとやらねば」と思った。人間は自然と切り離されて生きることができない。文明があまりにも高度化し、その便利さに慣れてしまい、自然への畏敬の念を我々は失っていた。しかし、大震災は、人と人、人と自然の関係を隔てていたものを取り戻したともいえる。電気がなかったらどう暮らしたらよいか、人はお互いに助け合えば生きられると分かった。機械がなくなり、手仕事が増えて、仕事を分け合うことができた。大震災は、これまでの社会の仕組みを考え直す機会にしなければいけないし、これまでと同じような仕組みを作るのではなく、誇りを持って未来へ継承できる仕組みを作りたい。これからは、「循環と共生の思想」に基づく自律分散型の社会を目指していかねばならない。大きい電気だけに頼らず、1人ひとりがバイオマスや太陽光などの自然エネルギーを分散して持つことによって緊急時のリスク軽減につな

がるし、食料の地産地消も地域でできる。誰もが弱者の立場を考え、また自分がそうした立場になり得ることを前提にまちづくりをすれば、誰に対しても住みよいまちができる。我々は、この大震災を、本当に実現すべき社会像をみんなでしっかりと考え、持続可能な地域社会を実現する転換点にしなければならない。

今、日本がこれからどうするのか、世界中が注目している。未来の人たちに誇りを持って手渡せる地域や社会とはどのようなものかを真剣に考える必要がある。私自身の中で震災は全く色褪せていないし、震災の学びを活かして、今、何をすることが重要だと思っている。持続可能な社会、子どもたちの未来をどうつくっていくか、そのために、我々は何をするべきか。また、生きることの意味は何なのか、自分たちはどう生きていくべきなのか。震災によって問われたのだと思う。これまで通りの生活に戻ってしまう人たちに「このままで本当にいいの？」と問いかけ、揺り動かしていきたい。子どもたちがピュアな時期に未来をどう作るかという意識を持ったら、世の中はものすごいスピードで変わっていくだろう。既成のものを変えていくのは大変だし、ジレンマもある。しかし、震災から約2年が経過しようとしている現在、持続可能な地域や社会をつくらうとしている人たちが結びつき、少しずつ希望が見えてきていると感じる。その希望を絶やさないように、それらを可視化していくことが私の今のテーマである。東北が成し遂げていこうとすることを全国、世界に向けて、はっきりと語っていきたい。

大学

## 子どもたちと、ともに学びあうことがESDをはじめの第一歩。

仙台市

小金澤 孝昭 宮城教育大学

取材日 2012.11.20

人文地理学、地域経済論、持続発展教育学が専門。自然に立脚した生業によって成り立つ農林漁村と、消費中心の都市とのつながりの重要性を説く。食農教育の第一人者。FEEL 社の都市環境教育・学習推進会議委員長、仙台いくね研究会代表世話人、仙台広域圏ESD・RCE運営委員会委員長など、地域社会と連携した活動にも精力的に取り組む。

### 3月11日 14時46分

あの日は10時30分から12時まで、栗原市役所での環境審議会の会議があった。ガソリンが少なくなっていたので、東北自動車道のサービスエリアでガソリンを満タンにして大学に戻った。宮城

教育大学には教員研修の留学生4人が研修に来ていて、彼らが1年の研修期間を終えて証書を受け取る卒業式が14時からあった。私の研究室にもミャンマーから1人研修に来ていた。14時20分で卒業式が終了し、研究室に戻った矢先に大きな揺れを感じた。